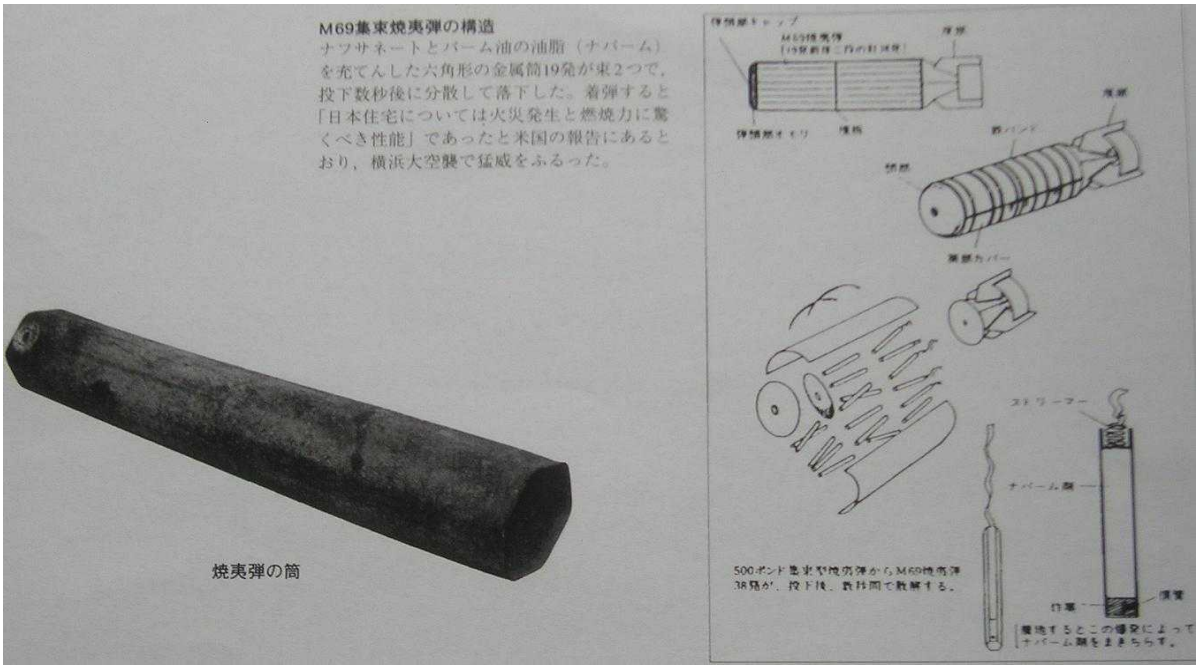
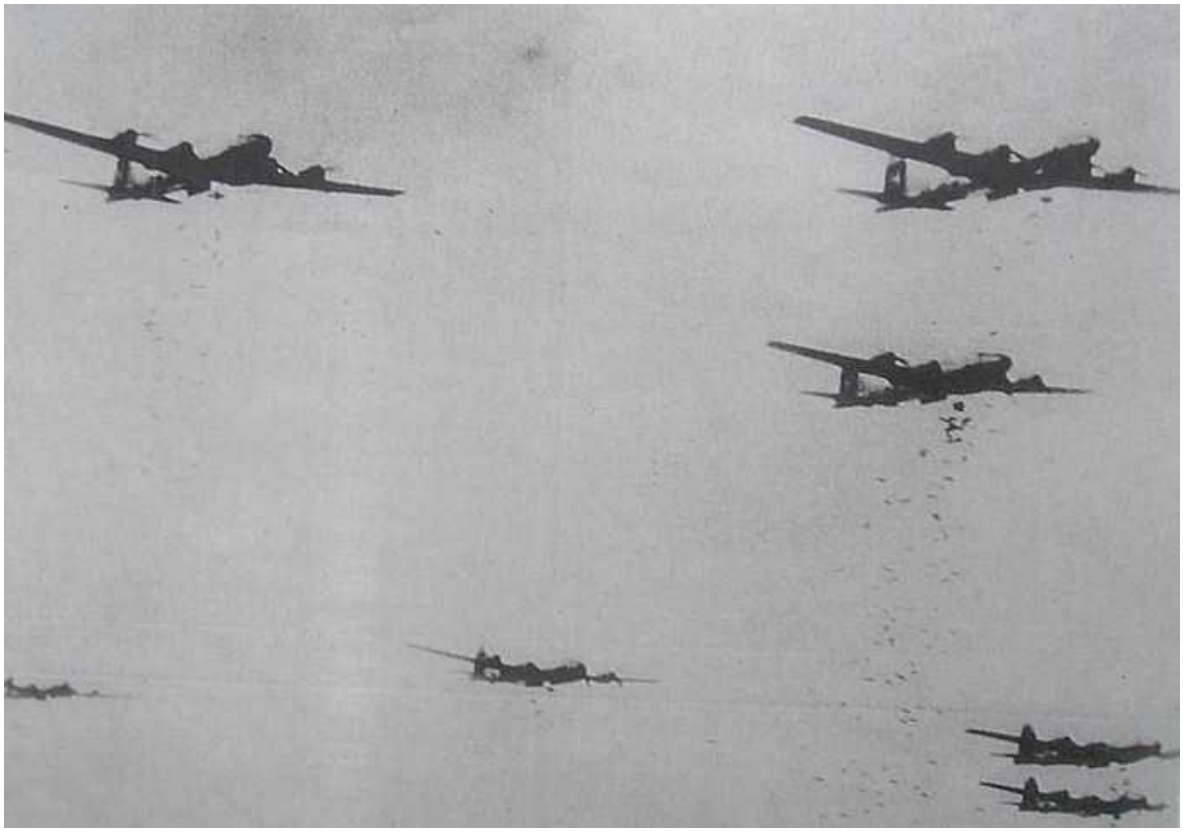
横浜大空襲　その２

永井　藤樹

富士山上空に集結し高度５５００メートルを維持し一路まっしぐらに横浜上空を目指したＢ２９の大編隊は、あらかじめ五ヶ所の爆撃目標地点（平均弾着点）を定めていた。第一は瑞穂埠頭へ行く道と東海道線が交わる東神奈川駅で、ここは神奈川の住宅地と埋立地の工場とが接する工住混合地帯である。第二の弾着地は平沼橋の所で、古川電工など保土ヶ谷区から西区にかけての帷子川沿いの工場地帯と戸部から保土ヶ谷にかけての住宅地、三菱重工業横浜ドックなど高島町付近の工場・倉庫地帯の接点である。第三は市役所のすぐそばの港橋で、これは伊勢佐木町など下町の商店・住宅街と関内の官庁・商店街とが接する地点で、現在のＪＲ関内駅である。第四は、「吉田新田」のつり輪にあたる所で、埋め立ての人身御供を祀ったという言い伝えのあるお三の宮（日枝神社）近くの吉野橋である。この付近は住居の中に町工場が混在していた。第五の地点は大鳥国民学校で、本牧一帯の住宅地の中心に当たる。この五ヶ所の爆撃目標地点に大型の新型集束焼夷弾（Ｍ６９）を投下し、その煙で囲まれた市街地に集中的に繰り返し執拗に焼夷弾を投下した。この焼夷弾はナフサネート（ガソリン）とパーム油（ヤシ油）の混合油脂（ナパーム）を充填した六角形の金属筒１９発が束２つで構成され、投下数秒後に自動的に分散し、発火した。



（写真１　焼夷弾　出典：写真で見る横浜大空襲）



（写真２　焼夷弾を投下中のＢ29、出典：写真で見る横浜大空襲）

（写真３　煙を噴き出し始めた横浜　出典：写真で見る横浜大空襲）

ルメイは指揮下の航空団を四つの大隊に分け、一個中隊をほぼ９機で編成し、四個中隊を一群団、四群団を一個大隊として五ヶ所の弾着点を各中隊が一度は必ず爆撃する「輪番方式」により短時間爆撃を行った。投下焼夷弾の総量は２，５７０トン、総数では４３万８５００個余になり、『東京大空襲』の投下量１，７８０トン余の約１．５倍に相当する膨大な量であった。一説によると畳一枚に焼夷弾３個の割合であったという。爆撃後十分な戦果を確認した第２１爆撃機集団は千葉県勝浦上空を経て洋上帰還した。

米軍機は市中心部の商店街・住宅密集地に無差別焼夷弾爆撃と逃げまどう市民に対してムスタングが機銃掃射を浴びせた。住宅地に軍事工場が散在していることを攻撃理由にした民間人への無差別殺傷爆撃である。しかし、官公庁、港湾施設、臨海部の大工場地帯、および中区山手の高級住宅地への攻撃は比較的少なく、被害もそれほど目立っていない。特に山手には外国人住宅やミッションスクールが多かったからであろうか。

『横浜大空襲』は緻密にして実に計画的、巧妙に立案された爆撃作戦である。横浜以外の横須賀・相模原・平塚などの県下の軍事施設や港湾施設にはほとんど被害がなかったのは、２０年８月末から年末までに神奈川県内に１０万以上の米軍を駐屯させる必要があったからであろう。アメリカは、戦後の日本占領政策をすでに見据えていたと考えられる。

損害状況は、未だに明らかでないところもあるが、神奈川県警の調査によると、罹災戸数７万５０１７戸、罹災者３１万１２１８人、死者は３，６５０人、行方不明３０９人、負傷者１万１９８人とされている。大量の焼夷弾が短時間のうちに集中的に投下され、逃げる余裕がなく急激な大火と一酸化炭素中毒や窒息によって人々は死んでいった。横浜市は、平成８年６月４日現在の県警調査のこのデータを公式なものと認め『横浜市史Ⅱ　第一巻』もこのデータを採用している。公の立場としては、これが根拠あるデータとして認めざるを得ないとしている。しかし『東京大空襲』では死者１０万人以上、罹災者１００万人の被害を出し、東京の１．５倍の焼夷弾を浴びた横浜の実態がこんなものでなかったのは容易に推測できるし、市もそのように認識している。しかし、６０年余が経過した現在、今後どのように調査しても、客観性あるデータの収集は不可能としている。

犠牲者が特に多かったのは、南区の京浜急行黄金町駅から三春台、西区の霞が丘にかけての一帯、神奈川区の東横線反町付近、ＪＲ東神奈川駅付近などであるが、そのほとんどが、婦人、老人、子どもであった。成年男子は戦場に駆り出され、軍需工場へ動員させられていたからである。死者の中には、

一家全滅などで無縁になり、各所の仮埋葬地から三ツ沢共葬墓地に移葬された人々も少なくなかったが、現在その方々の氏名はおろか、性別さえも確かめるすべがないという。

この日の惨状を一市民は、次のように述べている。当日　彼は家族四人で黄金町まで逃げ延びてきた中学二年生Ｓ・Ｋさん（１３歳）で、黄金町駅に留まるべきかどうかで家族の意見が分かれ、それが生死をわけることになったという。

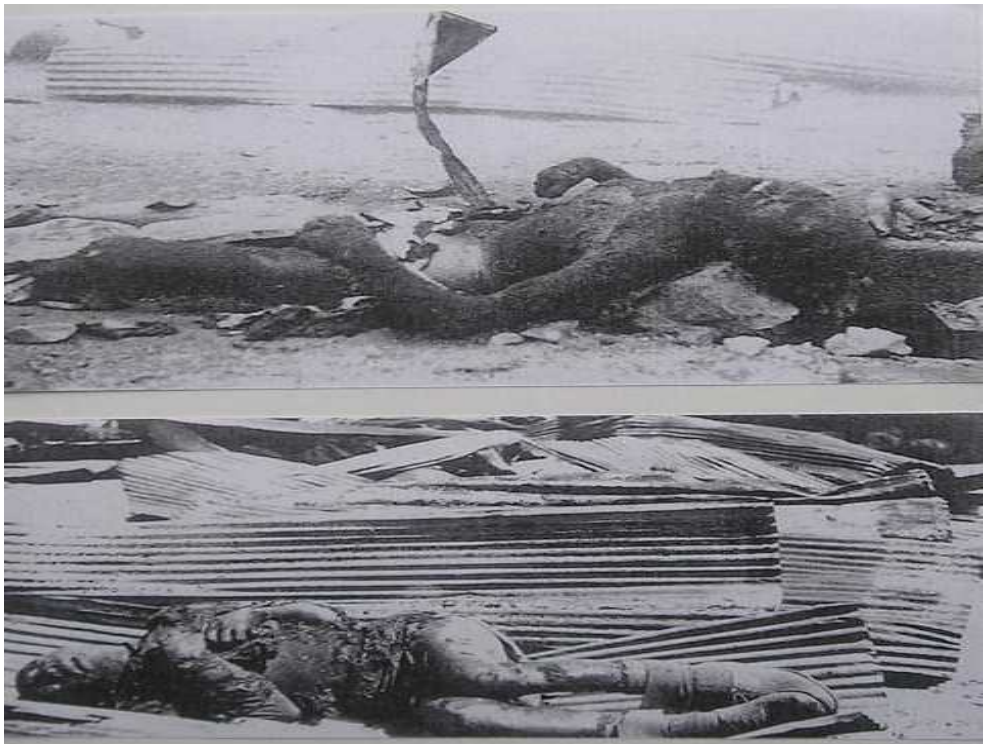
黄金町駅周辺の建物は、疎開で取り払われていて、そこへ多くの住民が逃げ込んでいた。そのところへ、湘南電車（現京浜急行）が空襲を避けるために停車して乗客を降ろした。付近では戦闘爆撃機が低空から機銃掃射を繰り返し、銃撃に曝された市民はガード下や駅構内へ身を隠した。人々の上へ焼夷弾が降り注ぎ、久保山から阪東橋にかけて出現した灼熱地獄に人々は逃げ場を失っていた。

Ｓ・Ｋさんは「当時の男子の役目として、見張りのため家の前の道路に出て空を見上げていた。雲ひとつなく晴れわたっていた大空の西の方か
ら　二、三十機を一編隊としたＢ２９の大群が続々と殺到してきた。急遽教科書を取りに家の中に戻り戸を開けて外を見ると、伊勢佐木町方面の家屋がどす黒い煙と炎を吹き上げているのが目に入った。空を見上げると家の斜め上を飛んでいたＢ２９の一群の弾倉が開き、多数の焼夷弾が落ちてくるのが目に入った。家の前と裏にある路地に油脂焼夷弾がものすごい音響をたてて落下し、あたり一面に火のついた液体をまき散らした。家の屋根、塀がいっせいに燃えだした。私は叫び声をあげて防空壕に飛び込み、中にいた母の手を握り外に引きずり出し、続いて姉も出てきた。裏に住むＫ子さんを含め四人は一団となって黄金町駅に通じる電車通りに出ると、市電の線路の上に焼夷弾の直撃を腹に受け、内臓をむき出しにして死んでいる婦人を見た。周囲は右往左往する避難民で一杯だ。親にはぐれたとみられる三歳ぐらいの女の子がいた。助けたいが自分のことで精一杯だ。私たち四人は互いに名を呼びあいながら人々の間を潜り抜け、黄金町駅を目指して走った。燃えている家の火勢は強く、容赦なく炎を吹きつける。その頃になると火が風を呼ぶのか竜巻が起こり始めた。焼けたトタン板が飛び交う。ものすごい風に飛ばされそうな防空頭巾を、片手でしっかりと抑え駅に着いた。周囲は火の海だが、不思議に駅は燃えていない。構内は電車から降りた人々で一杯だ。皆不安そうな顔をしている。泣いている子供を叱っている母親らしい女性、まだ大丈夫かしらとささやき合っている女学生風の一団。火勢はものすごく、音をたてて燃えている。

ここに来て私たちの意見が分かれた。このまま駅に留まろうと言いはる母、もっと先に逃げようと主張する私と姉、結局嫌がる母を無理やり駅から連れ出し、裏にある川渕に出た。すでに川渕から橋にかけて数百人の避難民が集まり出している。周囲の火はゴーゴーと音を立て迫ってくる。不気味な白煙が漂い始めた。一刻も猶予は出来ない。消防士らしい人が「阪東橋の一角が燃えていないぞ。あそこへ逃げろ」と絶叫するが人々は動こうとしない。橋までの両側の家が火を吹き、黒煙を吐いているからだ。はたして橋まで到達できるのか、とにかく熱い、焦熱地獄だ。何人かの男女が防火用水の水を鉄兜ですくい、頭からかぶり、やにわに阪東橋めがけて駆け出した。私たちもそれを真似て頭から水をかぶり走り出した。炎と煙が吹きつける中を頑張るんだと心の中で叫び、姉と共に母を抱きかかえながら走った。突然、熱いよと泣き叫ぶ子供の声が聞こえ２，３メートル後を母親と一緒に走っていた子供が火だるまとなっている。母親は気が狂ったようにその火をはたいている。私と姉がその子に駆け寄り火を消した。私たちはその母子を助けながら阪東橋の一角にたどり着いた。燃えていないその一角では、先に到着した人たちが川から水をすくいバケツリレーで家々に水をかけ延焼を防いでいた。私たちも仲間に加わった。この一角を守るんだ。ここが燃えれば命はない。飛んでくる火の粉はものすごく、烈風に乗り雨あられのように飛んでくる。

ようやく大火災も衰えを見せはじめ下火になってきた。疲れきって川渕にへたり込んでいた人々が立ち上がり、次々と自分たちの住居の方に歩きはじめた。私たちも家に向かって歩きはじめ、黄金町にたどり着き駅の中を見て驚いた。駅は完全に焼け落ち、先ほど私たちと一緒にいた人たちは構内に折り重なって真黒になって死んでいる。ある人は歯をむき出し、またある人は虚空をつかみ死んでいるのだ。黄金町から赤門までの電車通りは、死体の行列だ。赤ん坊を抱いたまま死んでいる母親、缶詰を手につかんだまま死んでいる子供。元住んでいた家路についたが、あたり一面焼野原だ。近所の人々も続々と帰ってきた。皆眼を真っ赤に腫らしている。周囲を見回して驚いた。子供たちの遊び場だった赤門山が一木一草も残さず燃え尽きている。青々と生い茂った草木が何もなく、ただ大木が真っ黒になって一本の棒のように空に向かって突き出ているだけだ。私はあらためて焼夷弾の威力に驚いた」

出典：「横浜の空襲と戦災」巻１　体験談編
横浜の空襲を記録する会編集昭和 51 年 6 月発行　黄金町の惨劇より



（写真４　空襲の犠牲者　出典：写真で見る横浜大空襲）

（写真５　空襲直後の街　出典：写真で見る横浜大空襲）

平成 21 年 9 月 6 日（日）。空襲当日のＳ．Ｋさん家族の避難行動を検証すべく、黄金町から阪東橋までの間を実地踏査した。家並み、街並み、川幅、道路状況など　あらゆる面で様変わりしているはずである。が　それでも現場に立つことの重要性は変わらないと思うからだ。

京浜急行を黄金町駅で下車し「藤棚浦舟通り」を北上して、初音町交差点から１７０ｍほど遡って、歩道橋を右に曲がって「赤門町」に至った。赤門町１丁目は中区に、２丁目は西区に属する。同じ町名なのに丁目が異なるだけで区名が変わる理由は地元の交番でもわからない。どちらか一方に整理すればよさそうに思うが、若いお巡りさんは、何も奇異に思っていないようだ。そんなことを訊ねるおっさんのほうが余程おかしいと言わんばかりの顔をしている。「俺は管区通り動いているだけだよ」。こんなことを若いお巡りさんに訊ねるのは、筋違いというものだろう。事実「赤門町１丁目」は中区の伊勢佐木警察署の管轄、「赤門町２丁目」は西区戸部警察署で、町名に関係なく分区通りの縄張りである。

赤門町は昭和１０年の町制で中区に成立し、昭和１９年に中区から南区と西区が分離した際、同じ町名でありながら中区と西区に分かれた。市役所の住居表示係も区政推進課も理由は分からないという。しかし、こんな例は赤門町だけでないことが分かった。例えば、桜木町の１～３丁目は中区に、４～７丁目は西区の字区域に属し、近くの花咲町も１～３丁目と４～６丁目はそれぞれ中・西両区の字区域に分かれている。「今の時代には考えられない区割りだ」と市の役人も言う。住民感情なぞ考慮の埒外の中央官僚の「御上」意識の証ではないか。それともすっきり区割りできない何か特別な理由でもあったのか。例えば選挙地盤の関係とか、利害が絡んでいるのかもしれない。しかし、当時は翼賛選挙だったからその必要性も薄い。

西区浜松町で第１国道に接続する「藤棚浦舟通り」は藤棚町から中村川の川べりの町浦舟町に通じる。この通りに平行して、狭い「赤門通り」が両丁内を通る。１丁目、２丁目の区分けは「東福寺」を境にして、黄金町駅側が中区赤門町１丁目、隣接する北側が西区赤門町２丁目である。町名は「東福寺」の赤い山門に由来するのではないか。色鮮やかで美しい朱漆塗りの山門である。

（写真６　赤門町東福寺山門）

Ｓ・Ｋさんは「赤門山」が子供たちの遊び場だったと言っている。「東福寺」の山号は「光明山」だから「赤門山」とは関係ない。そもそも「赤門山」など地図に載っていない。私の推測では赤い山門の開口部を額縁に見立てて、そこから覗き見える背後の山を自分らの格好の遊び場として、仲間内だけに通用する呼び名を付けたのではないだろうか。『赤門山で遊ぼうぜ』とか。町名も「赤門」だから丁度いい。こういう隠語は、仲間意識の結束をいや増す効果がある。

東福寺の境内の背後はコンクリートで高い擁壁工事が施され、その上に鬱蒼とした森が広がり「野毛山公園」へ続く。Ｓ．Ｋさんが言う「赤門山」はこの山と思って間違いなさそうだ。

私は「赤門通り」を黄金町駅に向かって戻り「大岡川」に架かる「太田橋」に出た。橋の袂、川の左岸にかつての外相藤山愛一郎書の「この旗のもとに」の石碑が右に、左に「オリンピック開催記念昭和 39 年 7 月吉日、吉田町末吉三・四町内会」の碑（いしぶみ）が置かれてある。藤山愛一郎はＡ級戦犯、岸　信介の要請で民間人として初めて外相として入閣し、後に神奈川一区を地盤とした衆議院議員で、岸の意向を汲んで「安保改正」に取組んだ政治家である。昭和３５年は、６０年安保の年であった。

その３に続く